

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこで暇乞いをすることを許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ回されることであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にいる同心で、この同心は罪人の親類の中で、おも立つた一人を大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、いわゆる大目に見るのであつた、黙許であつた。

当時遠島を申し渡された罪人は、も

ちろん重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して盗みをするために、人を殺し火を放ったというような、獰悪な人物が多数を占めていたわけではない。高瀬舟に乗る罪人の過半は、いわゆる心得違いのために、思わぬ科を犯した人であつた。有りふれた例をあげてみれば、当時一相對死と言つた情死をはかつて、相手の女を殺して、自分だけ生き残つた男というような類である。

そういう罪人を載せて、入相の鐘の鳴るころにこぎ出された高瀬舟は、黒ずんだ京都の町の家々を兩岸に見つ

つ、東へ走って、加茂川を横ぎって下  
るのであった。この舟の中で、罪人と  
その親類の者とは夜どおし身の上を  
語り合う。いつもいつも悔やんでも返  
らぬ繰り言である。護送の役をする同  
心は、そばでそれを聞いて、罪人を出  
した親戚眷族の悲惨な境遇を細かに  
知ることができた。所詮町奉行の白州  
で、表向きの口供を聞いたり、役所の  
机の上で、口書を読んだりする役人の  
夢にもうかがうことのできぬ境遇で  
ある。

同心を勤める人にも、いろいろの性  
質があるから、この時ただうるさいと

思つて、耳をおおいたく思う冷淡な同心があるかと思えば、またしみじみと人の哀れを身に引き受けて、役がらゆえ気色には見せぬながら、無言のうちにひそかに胸を痛める同心もあつた。場合によつて非常に悲惨な境遇に陥つた罪人とその親類とを、特に心弱い、涙もろい同心が宰領してゆくことになる、その同心は不覚の涙を禁じ得ぬのであつた。

そこで高瀬舟の護送は、町奉行所の同心仲間で不快な職務としてきらわれていた。

いつのころであつたか。たぶん江戸

で白河樂翁侯が政柄を執っていた寛政のころでもあっただろう。智恩院の桜が入相の鐘に散る春の夕べに、これまで類のない、珍しい罪人が高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助と言って、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。もとより牢屋敷に呼び出されるような親類はないので、舟にもただ一人で乗った。

護送を命ぜられて、いっしよに舟に乗り込んだ同心一羽田庄兵衛は、ただ喜助が弟殺しの罪人だということだけを聞いていた。さて牢屋敷から棧橋

まで連れて来る間、この瘦肉の、色の青白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬って、何事につけても逆らわぬようにしている。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるような、温順を装って権勢に媚びる態度ではない。

庄兵衛は不思議に思った。そして舟に乗ってから、単に役目の表で見張っているばかりでなく、絶えず喜助の挙動に、細かい注意をしていた。

その日は暮れ方から風がやんで、空一面をおおった薄い雲が、月の輪郭を

かすませ、ようよう近寄って来る夏  
の温かさが、兩岸の土からも、川床の土  
からも、もやになって立ちのぼるか  
と思われる夜であつた。下京の町を離  
れて、加茂川を横ぎつたころからは、あ  
たりがひっそりとして、ただ舳にさか  
れる水のささやきを聞くのみである。  
夜舟で寝ることは、罪人にも許され  
ているのに、喜助は横になろうともせ  
ず、雲の濃淡に従つて、光の増したり  
減じたりする月を仰いで、黙っている。  
その額は晴れやかで目にはかすかな  
かがやきがある。

庄兵衛はまともには見ていぬが、始

終喜助の顔から目を離さずにいる。そして不思議だ、不思議だと、心の内で繰り返している。それは喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しそうで、もし役人に対する気がねがなかったなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌い出すとかしそうに思われたからである。

庄兵衛は心の内に思った。これまでこの高瀬舟の宰領をしたことは幾たびだか知れない。しかし載せてゆく罪人は、いつもほとんど同じように、目も当てられぬ気の毒な様子をしていった。それにこの男はどうしたのだらう。

遊山船にでも乗ったような顔をして  
いる。罪は弟を殺したのだそうだが、  
よしやその弟が悪いやつで、それをど  
んなゆきがかりになって殺したにせ  
よ、人の情としていい心持ちはせぬは  
ずである。この色の青いやせ男が、そ  
の人の情というものが全く欠けてい  
るほどの、世にもまれな悪人であらう  
か。どうもそうは思われない。ひよつ  
と気でも狂っているのではあるまい  
か。いやいや。それにしては何一つ  
じつまの合わぬことばや挙動がない。  
この男はどうしたのだらう。庄兵衛が  
ためには喜助の態度が考えれば考え

るほどわからなくなるのである。

しばらくして、庄兵衛はこらえ切れなくなつて呼びかけた。「喜助。お前何を思っているのか。」

「はい」と言つてあたりを見回した喜助は、何事をお役人に見とがめられたのではないかと気づかうらしく、居ずまいを直して庄兵衛の気色を伺つた。

庄兵衛は自分が突然問いを發した動機を明かして、役目を離れた応対を求めるといわけをしなくてはならぬように感じた。そこでこう言つた。「いや。別にわけがあつて聞いたのではな

い。実はな、おれはさつきからお前の島へゆく心持が聞いてみたかったのだ。おれはこれまでこの舟でおおぜいの人を島へ送った。それはずいぶんいろいろな身の上の人だったが、どれもこれも島へゆくのを悲しがって、見送りに来て、いっしよに舟に乗る親類のものと、夜どおし泣くにきまっていた。それにお前の様子を見れば、どうも島へゆくのを苦にしているやうだ。いったいお前はもう思っているのだい。」

喜助はにっこり笑った。「御親切におっしゃってください、ありがとうございます」

ございます。なるほど島へゆくということ  
は、ほかの人には悲しい事でござ  
いましょう。その心持ちはわたくしに  
も思いやってみるができます。し  
かしそれは世間でらくをしていた人  
だからでございます。京都は結構な土  
地ではございますが、その結構な土地  
で、これまでわたくしのいたして参っ  
たような苦しみは、どこへ参ってもな  
かろうと存じます。お上のお慈悲で、  
命を助けて島へやってくださいます。  
島はよしやつらい所でも、鬼のすむ所  
ではございますまい。わたくしはこれ  
まで、どこといって自分のいていい所

というものがございませんでした。こ  
ん度お上で島にいろとおっしゃって  
くださいます。そのいろとおっしゃる  
所に落ち着いていることができます  
のが、まず何よりもありがたい事でご  
ざいます。それにわたくしはこんな  
かよわいからだではございますが、つ  
いぞ病気をいたしたことはございま  
せんから、島へ行ってから、どんなつ  
らい仕事をしたって、からだを痛める  
ようなことはあるまいと存じます。そ  
れからこん度島へおやりくださるに  
つきまして、二百一文の鳥目をいただ  
きました。それをここに持っておりま

す。」こう言いかけて、喜助は胸に手を当てた。遠島を仰せつけられるものには、鳥目二百銅をつかわすというのは、当時の掟であつた。

喜助はことばをついだ。「お恥ずかしい事を申し上げなくてはなりませんぬが、わたくしは今日まで二百文というお足を、こうしてふところに入れて持っていたことはございませぬ。どこかで仕事に取りつきたいと思って、仕事を尋ねて歩きました、それが見つかり次第、骨を惜しまずに働きました。そしてもらった銭は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりません

だ。それも現金で物が買って食べられる時は、わたくしの工面のいい時で、たいていは借りたものを返して、またあとを借りたのでございます。それがお牢にはいつてからは、仕事をせずに食べさせていただきます。わたくしはそればかりでも、お上に対して済まない事をいたしているようになりませぬ。それにお牢を出る時に、この二百文をいただきますのでございます。こうして相変わらずお上の物を食べていて見ますれば、この二百一文はわたくしが使わずに持っていることができます。お足を自分の物にして持つ

ているということは、わたくしにとつては、これが始めてございます。島へ行ってみますまでは、どんな仕事ができるかわかりませんが、わたくしはこの二百文を島でする仕事の本手にしようと思っております。」こう言つて、喜助は口をつぐんだ。

庄兵衛は「うん、そうかい」とは言つたが、聞く事ごとにあまり意表に出たので、これもしばらく何も言うことができずに、考え込んで黙っていた。

庄兵衛はかれこれ初老に手の届く年になっていて、もう女房に子供を四人生ませている。それに老母が生きて

いるので、家は七人暮らしである。平生人には各賚と言われるほどの、儉約な生活をしていて、衣類は自分が役目のために着るもののほか、寝巻しかこしらえぬくらいにしている。しかし不幸な事には、妻をいい身代の商人の家から迎えた。そこで女房は夫のもらう扶持米で暮らしを立ててゆこうとする善意はあるが、ゆたかな家にかわいがられて育った癖があるので、夫が満足するほど手元を引き締めて暮らしでゆくことができない。ややもすれば月末になって勘定が足りなくなる。すると女房が内証で里から金を持って

来て帳尻を合わせる。それは夫が借財  
というものを毛虫のようにきらうか  
らである。そういう事は所詮夫に知れ  
ずにはいない。庄兵衛は五節句と言  
っては、里方から物をもらい、子供の  
七五三の祝いだと言っては、里方から  
子供に衣類をもらうのでさえ、心苦し  
く思っているのだから、暮らしの穴を  
うめてもらったのに気がついては、い  
い顔はしない。格別平和を破るような  
事のない羽田の家に、おりおり波風の  
起こるのは、これが原因である。

庄兵衛は今喜助の話聞いて、喜助  
の身の上をわが身の上に引き比べて

みた。喜助は仕事をして給料を取って  
も、右から左へ人手に渡してなくして  
しまうと言った。いかにも哀れな、気  
の毒な境界である。しかし一転してわ  
が身の上を顧みれば、彼と我れとの間  
に、はたしてどれほどの差があるか。  
自分も上からもらう扶持米を、右から  
左へ人手に渡して暮らしているに過  
ぎぬではないか。彼と我れとの相違は、  
いわば十露盤の桁が違っているだけ  
で、喜助のありがたがる二百一文に相  
当する貯蓄だに、こっちはないのであ  
る。

さて桁を違えて考えてみれば、鳥目

二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでいのに無理はない。その心持ちはこっちから察してやることができる。しかしかに桁を違えて考えてみても、不思議なのは喜助の欲のないこと、足ることを知っていることである。

喜助は世間で仕事を見つけるのに苦しんだ。それを見つけさえすれば、骨を惜しまずに働いて、ようよう口を糊することのできるだけで満足した。そこで牢に入ってから、今まで得がなかった食が、ほとんど天から授けられるように、働かずに得られるのに驚

いて、生まれてから知らぬ満足を覚えてたのである。

庄兵衛はいかに桁を違えて考えてみても、ここに彼と我れとの間に、大いなる懸隔のあることを知った。自分の扶持米で立ててゆく暮らしは、おりおり足らぬことがあるにしても、たいてい出納が合っている。手いっぱい生活である。しかるにそこに満足を覚えたことはほとんどない。常は幸いとも不幸とも感ぜずに過ごしている。しかし心の奥には、こうして暮らしていて、ふいとお役が御免になったらどうしよう、大病にでもなったらどうしよう

うという疑懼が潜んでいて、おりおり妻が里方から金を取り出して来て穴うめをしたことなどがわかると、この疑懼が意識の閥の上に頭をもたげて来るのである。

いったいこの懸隔はどうして生じて来るだろう。ただ上べだけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こっちにはあるからだと言ってしまう。え、それまでである。しかしそれはうそである。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のような心持ちにはなられそうにない。この根底はもっと深いところにあるようだ、庄

兵衛は思った。

庄兵衛はただ漠然と、人の一生というような事を思ってみた。人は身に病がある、この病がなかったらと思う。その日その日の食がないと、食ってゆかれたらと思う。万一の時に備えるたくわえがないと、少しでもたくわえがあつたらと思う。たくわえがあつても、またそのたくわえがもつと多かつたらと思う。かくのごとくに先から先へと考えてみれば、人はどこまで行つて踏み止まることができるものやらわからない。それを今日の前で踏み止まっ  
て見せてくれるのがこの喜助だと、

庄兵衛は気がついた。

庄兵衛は今さらのように驚異の目をみはって喜助を見た。この時庄兵衛は空を仰いでいる喜助の頭から毫光がさすように思った。

庄兵衛は喜助の顔をまもりつつまた、「喜助さん」と呼びかけた。今度は「さん」と言ったが、これは充分の意識をもって称呼を改めたわけではない。その声がわが口から出てわが耳に入るや否や、庄兵衛はこの称呼の不穏当なのに気がついたが、今さらすでに出たことばを取り返すこともできなかつた。

「はい」と答えた喜助も、「さん」と呼ばれたのを不審に思うらしく、おそるおそる庄兵衛の気色をうかがった。

庄兵衛は少し間の悪いのをこらえて言った。「いろいろの事を聞くようだが、お前が今度島へやられるのは、人をあやめたからだという事だ。おれについてにそのわけを話して聞せてくれぬか。」

喜助はひどく恐れ入った様子で、「かしこまりました」と言って、小声で話し出した。「どうも飛んだ心得違いで、恐ろしい事をいたしまして、な

んとも申し上げようがございませぬ。  
あとで思ってみますと、どうしてあんな事ができたかと、自分ながら不思議でなりませぬ。全く夢中でいたしましたのでございます。わたくしは小さい時に二親が時疫でなくなりまして、弟と二人あとに残りました。初めはちょうど軒下に生まれた犬の子にふびんを掛けるように町内の人たちがお恵みくださいますので、近所じゅうの走り使いなどをいたして、飢え凍えもせず、育ちました。次第に大きくなりまして職を捜しますにも、なるたけ二人が離れないようにいたして、いっし

よにいて、助け合って働きました。去年の秋の事でございます。わたくしは弟といっしょに、西陣の織場にはいりまして、空引きということをしてきました。とになりました。そのうち弟が病気で働けなくなったのでございます。そのころわたくしどもは北山の掘立小屋同様の所に寝起きをいたして、紙屋川の橋を渡って織場へ通っております。たが、わたくしが暮れてから、食べ物などを買って帰ると、弟は待ち受けていて、わたくしを一人でかせがせてはすまないすまないと申しております。た。ある日いつものように何心なく帰

って見ますと、弟はふとんの上に突っ  
伏してしまして、周囲は血だらけなの  
でございます。わたくしはびっくりい  
たして、手に持っていた竹の皮包みや  
何かを、そこへおっぽり出して、そば  
へ行つて『どうしたどうした』と申し  
ました。すると弟はまっ青な顔の、両  
方の頬からあごへかけて血に染まっ  
たのをあげて、わたくしを見ましたが、  
物を言うことができませぬ。息をいた  
すたびに、傷口でひゅうひゅうとい  
音がいたすだけでございます。わたく  
しにはどうも様子がわかりませんの  
で、『どうしたのだい、血を吐いたの

かい』と言って、そばへ寄ろうといった  
すと、弟は右の手を床に突いて、少し  
からだを起こしました。左の手はしっ  
かりあごの下の所を押えています、  
その指の間から黒血の固まりがはみ  
出しています。弟は目でわたくしのそ  
ばへ寄るのを留めるようにして口を  
ききました。ようよう物が言えるよう  
になったのでございます。『すまない。  
どうぞ堪忍してくれ。どうせなおりそ  
うにもない病気だから、早く死んで少  
しでも兄きにらくがさせたいと思っ  
たのだ。笛を切ったら、すぐ死ねるだ  
ろうと思ったが息がそこから漏れる

だけで死ねない。深く深くと思って、  
力いっぱい押し込むと、横へすべって  
しまった。刃はこぼれはしなかったよ  
うだ。これをうまく抜いてくれたらお  
れは死ねるだろうと思っている。物を  
言うのがせつなくっていけない。どう  
ぞ手を借して抜いてくれ』と言うので  
ございます。弟が左の手をゆるめると  
そこからまた息が漏れます。わたくし  
はなんと言おうにも、声が出ませんの  
で、黙って弟の喉の傷をのぞいて見ま  
すと、なんでも右の手に剃刀を持って、  
横に笛を切ったが、それでは死に切れ  
なかったの、そのまま剃刀を、えぐ

るように深く突っ込んだものと見えます。柄がやっと二寸ばかり傷口から出ています。わたくしはそれだけの事を見て、どうしようという思案もつかずに、弟の顔を見ました。弟はじつとわたくしを見詰めています。わたくしはやっとの事で、『待っていてくれ、お医者を呼んで来るから』と申しました。弟は恨めしそうな目つきをいたしました。弟は、また左の手で喉をしっかりと押えて、『医者なんになる、あゝ苦しい、早く抜いてくれ、頼む』と言うのでございます。わたくしは途方に暮れたような心持ちになって、ただ弟の

顔ばかり見ております。こんな時は、不思議なもので、目が物を言います。弟の目は『早くしろ、早くしろ』と言って、さも恨めしそうにわたくしを見ています。わたくしの頭の中では、なんだかこう車の輪のような物がぐるぐる回っているようでした。が、弟の目は恐ろしい催促をやめません。それにその目の恨めしそうなのがだんだん陰しくなって来て、とうとう敵の顔をでもにらむような、憎々しい目になってしまいます。それを見ていて、わたくしはとうとう、これは弟の言ったとおりにしてやらなくてはな

らないと思いました。わたくしは『しかたがない、抜いてやるぞ』と申しました。すると弟の目の色がからりと変わって、晴れやかに、さもうれしそうになりました。わたくしはなんでもひと思いにしなくてはと思ってひざを撞くようにしてからだを前へ乗り出しました。弟は突いていた右の手を放して、今まで喉を押えていた手のひじを床に突いて、横になりました。わたくしは剃刀の柄をしっかりと握って、ずっと引きました。この時わたくしの内から締めておいた表口の戸をあけて、近所のばあさんがはいって来ました。

留守の間、弟に薬を飲ませたり何かし  
てくれるように、わたくしの頼んでお  
いたばあさんなのでございます。もう  
だいぶ内のなかが暗くなっていまし  
たから、わたくしにはばあさんがどれ  
だけの事を見たのだからわかりませ  
んでしたが、ばあさんはあつと言った  
きり、表口をあけ放しにしておいて駆  
け出してしまいました。わたくしは剃刀  
を抜く時、手早く抜こう、まっすぐに  
抜こうというだけの用心はいたしま  
したが、どうも抜いた時の手ごたえは、  
今まで切れていなかった所を切った  
ように思われました。刃が外のほうへ

向いていましたから、外のほうが切れ  
たのでございましょう。わたくしは剃  
刀を握ったまま、ばあさんのはいつて  
来てまた駆け出して行ったのを、ぼん  
やりして見ておりました。ばあさんが  
行ってしまったから、気がついて弟を  
見ますと、弟はもう息が切れておりま  
した。傷口からはたいそうな血が出て  
おりました。それから年寄衆がおいで  
になって、役場へ連れてゆかれますま  
で、わたくしは剃刀をそばに置いて、  
目を半分あいたまま死んでいる弟の  
顔を見詰めていたのでございます。」

少しうつ向きかげんになって庄兵

衛の顔を下から見上げて話していた喜助は、こう言ってしまったって視線をひざの上に落とした。

喜助の話はよく条理が立っている。ほとんど条理が立ち過ぎていると言ってもいいくらいである。これは半年ほどの間、当時の事を幾たびも思い浮かべてみたのと、役場で問われ、町奉行所で調べられるそのたびごとに、注意に注意を加えてさらってみさせられたのとのためである。

庄兵衛はその場の様子を目のあたり見るような思いをして聞いていたが、これがはたして弟殺しというもの

だろうか、人殺しというものだろうか  
という疑いが、話を半分聞いた時から  
起こって来て、聞いてしまっても、そ  
の疑いを解くことができなかった。弟  
は剃刀を抜いてくれたら死なれるだ  
ろうから、抜いてくれと言った。それ  
を抜いてやって死なせたのだ、殺した  
のだとは言われる。しかしそのままに  
しておいても、どうせ死ななくてはな  
らぬ弟であつたらしい。それが早く死  
にたいと言つたのは、苦しさに耐えな  
かつたからである。喜助はその苦を見  
ているに忍びなかった。苦から救つて  
やろうと思って命を絶った。それが罪

であろうか。殺したのは罪に相違ない。  
しかしそれが苦から救うためであつ  
たと思うと、そこに疑いが生じて、ど  
うしても解けぬのである。

庄兵衛の心の中には、いろいろに考  
えてみた末に、自分よりも上のものの  
判断に任すほかないという念、オオト  
リテエに従うほかないという念が生  
じた。庄兵衛はお奉行様の判断を、そ  
のまま自分の判断にしようと思った  
のである。そうは思っても、庄兵衛は  
まだどこやらにふに落ちぬものが残  
っているのです、なんだかお奉行様に聞  
いてみたくならなかった。

次第にふけてゆくおぼろ夜に、沈黙  
の人―二人を載せた高瀬舟は、黒い水  
の面をすべって行つた。